

雪雜記

中谷宇吉郎

青空文庫

この頃大ていの雪の結晶が皆実験室の中で人工で出来るようになったので、自分ではひとりで面白がっている。よく人にそれはどういう目的の研究なんですかと聞かれるので、こうして雪の成因が判ると冬期の上層の気象状態が分るようになって、航空気象上重要なことになるのですよと返事をする。そうすると大抵の人はなるほどと感心してくれる。しかし実のところは、色々な種類の雪の結晶を勝手に作って見るのが一番楽しみなのである。

もう六年前の話になるが、初めて雪の結晶の顕微鏡写真を撮ってみようかと思いついた頃は、この美しい結晶が人工で出来ようとは夢にも思っていなかった。丁度その前年^{アメリカ}亜米利加のベントレ

イの雪の本が出版されたのが機縁となつて、日本の雪はどうだろうと思ひ付いたのであつた。初めの中^{うち}はとてもベントレイのような綺麗^{きれい}な写真は撮れないだろうかと思ひながら、とにかくやつて見ることにした。何よりも雪のとけないような寒い所でなくてはこの実験は出来ないので、附属屋の方へ行く廊下の片隅で始めることにした。此^{ここ}処はスチームも通つていないし、冬になるととても寒いので余り人も通らず、先^{くつき}ず究^{きう}竟^{きやう}の場所である。其^{そこ}処へ実験台の小さいのを一つと顕微鏡とを運んで、冬の間は一度もあけたことのない引戸をすっかりあけ放すと、先^さず準備は出来たのである。

札幌の一月は大体気温は零下七、八度位である。凍りついた引

戸を無理にあげると、廊下のコンクリートの路面から二尺位しゃくも積み上った吹溜ふきだまりの雪が、ぼろぼろとコンクリートの上へこぼれ落ちて来るのであった。そこで硝子板ガラスを紙につつんで外へ出して置いてすっかり冷え切ったところを取り出し、降って来る雪をその上に受けとって顕微鏡で覗くのである。なるほど今まで写真で見た通りの形をしている。実のところ、本当の雪を顕微鏡で覗いたのはこの時が初めてなのである。写真では黒白の線しか分らないのであるが、眼で見た時は、細い小凹こまか凸おうとつがあるために、繊細なああの模様の縁に空の光が反射して、水晶細工のような微妙な色が見えるのであった。しかし完全な結晶というのは稀まれであって、色々の形の汚い結晶が混っているの、それを取り除のけるのが一ひ

とほね

骨であつた。結局マツチの軸の頭を折つて、そのささくれた纖維の端で欲しい雪の結晶を吊^{つる}して綺麗な硝子板の上へ持つて来ることになつたのであるが、どうもとけやすく困つた。しかし色々やっている中に、それは手の暖みによる輻射熱^{ふくしゃねつ}と手で暖められた空氣の対流とによることが分つたので、手袋をはめることによつて難なく解決された。手袋を手から出る暖かみを遮断^{しゃだん}するために用いるのはちよつと面白いが、考えて見るまでもなくすべての防寒具の目的とするところは結局同じことなのである。手袋をはめると益々^{ますます}仕事は面倒になる。暫く^{しばら}やっている中に、いくら^が外套^{えいとう}をきこんでいても何時^{いつ}の間にか身体^{からだ}がすっかり冷え込んで、気がついて見ると足は小刻みにコンクリートの上をとんとん

と踏んでいる。慌^{あわ}てて暖い部屋へ逃げ帰って、スチームの放熱器に腰をかけて暖まるのである。

こんな騒ぎをしてやつと顕微鏡写真をとることは出来たのであるが、今になってその頃の写真をとり出して見ると随分下手な写真である。それでも初めて現像して見て、結晶の像が出て来た時はとても嬉^{うれ}しくて、濡^ぬれた乾^{かん}板^{ばん}を持って同僚の友人の所へ見せに行ったのであるから、随分滑稽^{こっけい}な話であつた。そんなことをしている中に最初の年の冬は明けてしまったのであるが、一度手がけて見ると、急に雪に対する愛着が出て来て、その後毎年冬になるのを待ち兼ねるようになった。そして前の年に見たと同じような形の雪の結晶と顕微鏡の下で会うのを楽しみにするようにな

った。

次の冬の正月休みの前になつて巧いことを思い付いた。それはとち^{とち}だけ十勝岳の中腹に山林監視人のためにヒュツテが出来ているのであるが、それを借りて皆で出かけて、雪の降る日は結晶の写真を撮り、天気の日には仕方がないからスキーをやろうという案なのである。駅から五里^りの雪道を、馬櫓^{ばろ}で顕微鏡だの写真用器具だの食料品だのを運ぶのは大仕事であつたが、計画は見事成功した。白^し樺^{らかば}の老樹の細い枝^{こまか}が樹氷につつまれて空一面に交錯している間に、僅^{わず}かばかりの空所があつて、その間を静かに降つて来る雪の結晶は、予期以上に繊細巧緻^{こうち}を極めた構造のものであつた。夜になつて風がなく気温が零下十五度位になつた時に静かに降り出す

雪は特に美しかった。真暗まつくらなヴェランダに出て懐中電燈でんとうを空に向けて見ると、底なしの暗い空の奥から、数知れぬ白い粉あが後から後からと無限に続いて落ちて来る。それが大体きまつた大きさの螺旋形らせんけいを描きながら舞つて来るのである。そして大部分のものはキラキラと電燈の光に輝いて、結晶面の完全な発達を知らせてくれる。標高は千百米位に過ぎないが、北海道の奥地遠く人煙じんえんを離れた十勝岳の中腹では、風のない夜は全くの沈黙と暗黒の世界である。その闇やみの中を頭上だけ一部分懐中電燈の光で区切つて、その中を何時いつまでも舞い落ちて来る雪を仰いでいると、いつの間にか自分の身体が静かに空へ浮き上つて行くような錯覚が起きて来る。外ほかに基準となるものが何も見えないのであるから、

そんな錯覚の起きるのは不思議ではないが、しかしその感覚自身は実に珍らしい今まで知らなかった経験であつた。

ヒュツテの中には部屋まんなかの真中に大きいストーヴがあつて、番

人の老人が太い三尺じやくもある立派な丸太を惜し気げもなくどんどん燃

してくれている。其処そこで十分暖まつてから、防寒外套を着てヴェ

ランダに出て写真をとるのである。顕微鏡写真の装置は固定した

ままヴェランダに出し放しになっているので、暫くしばらく休んでいる間

に、水鳥の胸毛よりももっと軽い雪がもう何寸ずんも積つもっている。軽

いといえ、十勝岳の真冬の降り立ての雪位軽いものは少いだろ

う。比重を測つて見ると百分の一よりも小さいことがある。まる

で空気ばかりのようなものである。よく縁日の雑沓ざつとうの中で、銅

の鹽たらひをぐるぐる廻まわして綿菓子というものを売っていることがあるが、あの綿菓子のような感じである。こんな雪はさつと払うとすぐ飛んでしまつて、そのまま仕事を続けるのに何の邪魔にもならない。この土地では冬の六カ月の間気温が零下五度以上に昇ることは殆ほとんどない。それで水の常態は固体であつて、液体の水というのは例外的に見られるだけである。それで周囲は全く水の中に埋うもれているはずなのに、物が濡ぬれるという心配は先ずないのだから面白いと思つた。千円の顕微鏡を雪の露天に放り出して置いても、乾いた布で拭ぬぐうだけの注意をしていれば何の故障も起らないのである。余り大切にしていゝ暖い部屋へ持ち込んで掃除をしていたら、温度の急変と雪がとけるためにかえつて色々な故障が

起りやすい。こんな所ではずぼらをするに限るのであつて、ただ注意すべきことは、水をこぼすことである。液体の水は此処では一種の危険品で、あやまってヴェランダの床の上などにこぼしたら、直ぐ凍りついてしまつて、その後は危くて歩くことも出来ない始末になる。

結晶がとける心配はないのであるから、いくらでも良い写真がとれるはずであるが、實際は初めの中はなかなか巧く行かなかつた。愚図々々している中に昇華作用で肝心の一番繊細な模様が消えてしまつたり、つい一番大切な珍らしい結晶に息を吹きかけてしまつたり、なかなかそう簡単には行かなかつた。ところが十勝行もその年の中に二回、次の年にも三回という風に度々重^{たびかさな}つて

行くと、不思議なことには雪の結晶が段々大きく見えて来て、それに硝子ガラスざいく細工か何かのように勝手に弄いじり廻まわすことが出来るようになって来た。どうも双児ふたごの結晶らしいと思われるものは、両方から引つ張るとちゃんと二つに分れるようになった。冬彦ふゆひこ先生の随筆に硝子の面に作った絹糸位の割れ目を顕微鏡で毎日覗いてみると、小山の中に峽きようこく谷があるように見えて来る。そうになると色々の現象が分つて来るというような意味の一節があつたように憶おぼえているが、どうもそういうことがありそうである。十勝岳ではよく水晶のような六角柱の雪の結晶で両底面に六花ろっかの板状結晶がついて丁度鼓のような形になったものが降つて来ることもある。そういう結晶は何とかして顕微鏡下に垂直に立てて、その側面の

写真をとりたのである。色々試みた末、唾つばを使うのが一番良いということが分った。マッチの軸の先をちよつと舐なめて硝子板をそつとつくと、唾の非常に小さい滴しずくが硝子板の上につく。ところが唾は氷点が低いと見えて、暫しばらくは過冷却の状態で液状の微滴のままになっている。そこで今一本のマッチの軸の頭を折つたもので結晶を吊つるしながら、丁度結晶が垂直に立つようにその一端を唾の滴にふれさせるのである。すると今まで過冷却の状態にあつた唾の滴はその瞬間に凍つて、結晶は巧うまく垂直に硝子面に凍りつくのであつた。このようにして色々の結晶の側面写真をとつて見ると、平面写真ばかり見ていたのではどうしても分らなかつたことが、飽あっけ気ない位簡単に分つて来るのでとても面白かつた。

その写真を沢山発表して暫くしたら、万国雪協議会英国部会長
 といういかめしい肩書きで、セリグマン氏から手紙が来た。おそ
 ろしく丁寧な文面で、「貴下の撮影にかかる雪の結晶写真の中、
 側面より撮影されし写真多数を拝見仕り候。つかまそうろう如何にして雪の結晶
 を垂直に立てられしや御差支えなくば御洩し被下度候」おさしつか
 というのである。それで早速「それにはマツチの軸と唾とを御使
 用になるが最適と存じ候」と書いて返事を出して置いた。折返し
 て返事が来たが、その文面がまたふるつていた。「雪の結晶の撮
 影に関する貴君の卓越せる技術を伝授被下、くだされ誠に感謝の至りに
 御座候」ごさそうろうというのであった。どうも真面目まじめなのか、ふざけてい
 るのかちつとも分らないが、この返事を見た時は思わず吹き出し

てしまった。

セリグマン氏といえば、その後ひどく苛められたことがあった。それというのは、先生は雪の結晶のことを simple snow flake といひ、牡丹雪ぼたんゆきのような雪片のことを compound snow flake といつて、snow crystal という言葉は、ざらめ雪のためにしまつて置かうというのである。私の方はそんな慾よくはないので、分離した結晶の方は snow crystal、牡丹雪のように沢山の結晶の集った雪片は snow flake ということにして置いた。ところが先生から世界中での命名を一定したいから自分の命名法を使わないかという勧誘が盛さかんに来る。もつともそのこと自身には私も賛成であるが、しかし雪の結晶の中には鼓もあれば、針状のものもある。どうも鼓や針

をflakeというのは少し可笑しいと思ったので、その由をいってやった。ところが大変である。折返しタイプライター五枚位の返事が来て、細々と自分の命名法の由来を書いて来るのであった。やつとの思いでたどたとその反駁を書いてやると、また五頁位の手紙である。何の辞書にはflakeという意味がこうなっている。何世紀頃にはどういう意味に使ったというのであるから、うんざりしてしまった。向うは秘書とタイピストとを使ってべらべらと喋れば済むことだし、こっちは一本の手紙を書くのに一日がかりなのだから、これではとても敵わないと諦めてしまった。それで、「英語はあなたの方が私より確かなのだから、そして命名法を一定することは私も賛成なのですから、爾今あなたの命名法

を使いましょう」とあつさり降参してしまった。

ところが思いがけず最近になって妙な援兵えんぺいが現れた。しかも

大変有力な援兵なのである。事の起りはセリグマン氏が私の雪の研究に大変好意を持ってくれて、『ネーチュア』という雑誌に詳

しい紹介を書いてくれたのである。但しただその中で crystal という

言葉は皆 flake と直して書いたのである。こっちは一度降参して

しまったのであるからどうしても良いと思っていたところが、それ

を読んだ英国の気象台長シムプソン博士が同誌の寄書欄へ早速一

文を寄せて、雪の命名法は中谷なかやの方が正しい、『オックスフォー

ド辞典』ではフレークという言葉はという調子にすっかりセリグ

マン氏の命名法をくさしてしまったのである。『ネーチュア』は

こんな寄書があると、相手の本人にその写しを送って答弁を求め、同時に掲載する習慣になっている。セリグマン氏の答弁は、自分の命名法は最上とは思わないが、外^{ほか}にもっとよい言葉がないから仕方がない、それにフレークという言葉はそれほど悪くはない、『ウェブスター辞典』によれば云々^{うんぬん}というのである。『オックスフォード』や『ウェブスター』なら僕だつて見たことがあるぞと思つて読んで行くと、最後に「それに中谷も私の命名法に最近賛成をしている」という一節があつたので思わず苦笑してしまつた。有力な援兵が来たら、その前に本隊があつさり全滅してしまつた形である。物事は何でも余り早く諦めてしまうのも考えものである。もつとも今これを蒸し返したらまたタイプライター五

頁の速射弾を受けるにきまっているから、当分はこつそり低温室にかくれて、手のひら位の大きさの人工雪でも作る工夫をしていた方が良さそうである。

十勝岳の思い出は皆なつかしいことばかりである。冬の深山の晴れた雪の朝位美しいものも少いであろうと今も時々思い出すことがある。それというのはその後私の健康上の問題もあって、十勝行は自然中止の形となってしまうからである。まだ止めてから三年位にしかないのに、何だか遠い昔のような気がしてならない。零下十五度の吹きさらしの中に立って、数時間も続けて仕事をするというような気力と体力とはもう再び返って来ないよ

うな気がして、心細い思いに耽^ふけることもある。

野外の仕事が封じられた形となったので、自然と研究は実験室内での仕事の方へ向いて行つた。それは低温室の中で雪の結晶を人工的に作ろうという問題である。低温室というのは、私のつとめている大学に二年ばかり前に出来た実験室で、八畳間位の室全体が年中零下五十度位まで温度を下げられるようになっていゝる室である。この部屋の中で雪を人工的に作ろうというのであるが、その中で実験するには、勿^{もちろん}論服^{ずきん}も頭巾も手袋も靴もすっかり防寒用のものを用い^{こまか}るのである。北満^{ほくまん}の厳寒の野に立つ哨兵^{しょうへい}と全く同じ服装をして細^{こまか}い物理の実験をしようというのだからなかなか思^はかうように仕事は捗^{はか}どらない。初めの中^{うち}はこれだけ十分な

防寒用意をしていれば大して身体に悪いこともなかろうと思つていたのであるが、^{しばらく}暫くやつて見るとこの仕事も余り健康の上には有難くないものだということが分つた。零下五十度にすることは滅多にないので、普通は零下三十度附近で仕事をするのであるが、それでも夏になると、外界と五十度位の温度の差がある。即ち部屋に出入りするごとに五十度の気温の急変にあうことになるのであるが、それがどうもいけないらしい。それでこの頃は、実験はすっかり元気な学生の人たちに頼んでしまつてゐるが、それでも暗い低温室の中で、^{うさぎ}兎の毛の先に作つた人工雪の結晶が白く光つてゐる様を思い見ると、時々はいつて見たい衝動にかられることがある。

雪を人工で作るといっても、別に大して新しい変った考えがあったわけではない。色々やって見たが、結局自然をそっくりそのまま真^ま似^ねる方が一番利口であつた。こんな問題になると人間の智^ち恵^えなどはまだなかなか駄目なものだと思つづく思つた。自然の真似というと、結局冷^{つめ}い空へ暖い水蒸氣を対流で送つてやつて凝結させることなのである。それで装置といつても、対流を巧^{うま}く生じさせて、その調節が出来るようにさえしてやれば良いのであつた。ただ天然の場合は数時間かかつて落ちて来る間にあれだけの発達をするのであるから、その時間だけ結晶を空中に浮游^{ふゆう}させる必要がある。それは低温室の中ではちよつとむずかしいので、差し当り兎の細い毛に結晶をつけて発達させることとした。丁度結晶が

兎の毛で吊^{つる}されたような形になつて出来るのである。兎の毛で吊した雪の結晶なんて少しいんちきだといわれるかも知れないが、まあ当分のところはそれで我慢してもらうより仕方がない。それで結局、気温と水蒸氣の量及び温度とを色々かえると、出来る結晶の形が皆違ふのである。まさかあんなものは出来そうもないと思つていた珍らしい形の結晶、例えば段々鼓や角^{かく}錐^{すい}なども、あんまり簡単に出来てしまつて少し飽^あ氣^{つけ}ない位であつた。ウエーゲナー教授がグリーンランドで一冬過^{すこ}した時に、あの全島を蔽^{おお}つてゐる氷山の裂罅^{クレパス}の底で、洋酒のコップ型の結晶を見付けたことがある。しかもそのコップは上部の壁の一部が開いて屏風^{びやうぶ}のよ^うな形になつていて、上から見ると六角の螺旋^{らせん}形^{けい}に捲^まき込んで

いるという念の入ったものであつた。即ち水を入れたらこぼれてしまふ形のコップである。ウェーゲナー教授は写真を撮つて来たから良いようなものの、ただのスケッチだったら到底信用出来ない位の不思議な形の結晶である。ところがその結晶までがわけなく出来たのにはちよつと驚いた。グリーンランドだから気温もずつと低くして、氷山の裂罅の中だから水蒸気の温度も低くして、供給度も減らして、最後に裂罅の底だから条件の変化も少くしてという風に考えて、その通りやつて見るとちゃんと屏風型のコップが出来るのだから不思議である。これなら先ず誰^{だれ}でも面白いだろう。若い元気な学生諸君はむやみと面白がつて勉強をして、次ぎ次ぎと色々な結晶を作つて来るので、見る見るそのレポートが

机の上にたまってしまふ。これではとてもたまらないので、休戦を申し込んで見たが、誰もちつとも怠けてくれない。その中^{うち}に計千枚位の写真と、積んだら一尺五寸位^{しゃくすん}になるレポートを作つて皆卒業して行つてくれたのでやれやれと思つたら、また新しい三年生の研究実験を始めねばならないという始末である。この調子で生涯働かされるのだつたら、研究というものも因果な商売である。その最も因果な所以^{ゆえん}が自分から面白くなつて止め^やられない点にあるのだから全く厄介なことである。雪の全種類の結晶が、気温と水蒸気の量とを変えることに依^よつて出来るといったのは実は少し胡魔化^{ごまか}しがあるので、自然の工^{たくみ}はなかなかそう簡単ではないようである。事実今までの千枚の人工雪の写真を見ると、雪の結晶の

殆んど全種類がその中にあるので、前の結論は嘘うそではない。しかしそれではまだ学問にはなっていないのである。それというのは、逆に或ある一定の結晶を指して、これを今作つて見ろといわれると少し困るのである。五回もやれば三回か四回は出来るのであるが、どうかしてこじれるとなかなか思う形の結晶が出来ないことがある。それではちよつと困るのであつて、要するにまだ結晶をきめる条件の中で隠された条件が沢山あることになる。気温とか水蒸気の量とかいう風に数値で簡単にあらわされる条件は見やすいので減多に見落すことはないのであるが、その外ほかに簡単に一つの数値で現わされない条件が大切な役割をすることがある。その中でこの場合先ず気の付いたことは、状態の一定度である。どうせ寒

暖計で測った気温は、例えば零下二十度といつても、それは空間的に考えれば、水銀球のある場所の周囲の平均温度を指しているのに過ぎない。また時間的に見ても或る時刻における温度というもの、その前後の短い時間の平均温度である。ところが暖い水蒸気と冷い空気との混和というような問題になると、時間的にも空間的にも非常にこまかく考えて見ると激しい偏差があるはずである。ところが普通の寒暖計で測るとそれは出て来なくて、水銀柱はその平均値を示すだけである。そして多くの場合にはこのような偏差は大した問題にはならぬので事が済んでいるのであるが、雪の結晶のような小さいものになると、それが非常にきいて来て良いはずなのである。

こう気が付いて見ると、今までのように気温いくら、水温いくらといった済ましてはいらなくなつて来た。同じく寒暖計が零下二十度を示していても、本当に気温が零下二十度になっている場合と、零下二十度を中心にしてその上下に激しく変化しているのが寒暖計には平均されて二十度と出ている場合とは大變な違いである。それで先ずその区別が雪の結晶の形に現われて来るか否かを見る必要が出て来た。それには気温と水蒸気の温度とをそれぞれ厳密に一定に保ちながら雪を作つて見るのが一番早道である。それで低温室の中に自働恒温装置を取付けた木箱を持ち込み、その内部では温度が常に一度の十分の二以上の変化のないようにして置いて、その中へ人工雪の製作装置を納めることとした。水蒸

氣を供給するための水槽の温度も勿論恒温装置を用いて一度の十分の一以内の精密度で一定に保つようにした。このようにして雪を作つて見たところが、結晶の形がまるで變つて來たのである。前には樹枝状の六花ろっかの結晶が出來た條件で、今度は大きい見事な角板が出來たりして全く驚かされてしまった。まだ始めて間もないのであるが、それでも人間の爪位つまの大きさの角板が出來たこともあつた。この調子では手のひら位の大きさの雪の結晶を作る話も満更夢まんざらとばかりはいわれなくなつて來た。

ところでこのように状態の偏差が結晶形にひどくきくとなると、どうしても髪の毛位の針金で熱電対ねつでんついを作つて、結晶の直前の氣温の変化を記録する必要が出來て來た。小人島へは小人島の機械を

持ち込まなければならぬことは、実は前から分っていたのであるが、億^{おつくう}劫だからなるべく胡魔化そうとしていたのが、とうとうばれた形である。この小人島の器械を低温室の中で使うのはなかなか急にはゆかない。もつともその間は先ず休戦状態で私の方は大いに助かる。しかしやる方は大変だろう。

結晶の出来る条件の方はまあ分やることが見付かつて結構であるが、それと同時に結晶自身をもつとよく見る必要がある。結晶内部の微細構造や角板の中に見える細い縞^{しま}などが一体何であるかはまだはつきり分っていないのである。今まで世界中で撮られた一万枚以上の雪の写真にあんなに綺麗^{きれい}に出ているこれらの模様の本体がまだ分っていないのだから随分妙な話であるが、本当の

ところまだよくは分っていないのである。それというのは今まで上から見た写真しか撮られていないからである。この微細構造の研究には、雪を染めて見るとか、油で固めて見るとかいうことも考えられたので、少しやって見たがどうも巧く行かなかった。それで断然正攻法と決めたのである。それは雪の結晶を、問題とする模様の所で二つに切つて、その切口を高倍率の顕微鏡で見ようというのである。雪の結晶を切るといっても今のところ別に名案もないので、一つ安全剃刀かみそりの刃で切つて見ようということになった。若い仲間の一人がこの役を引き受けて、この夏以来毎日低温室の片隅で、横で誰か人工雪を作るのを片っ端から引受けては切っている。初めから判つていたように、そんなことが出来るは

ずのものではない。そして事実三カ月かかってもまだ切れなかったのである。どうしようかという相談があつても、まあ今に切れるようになると思つて毎日切つてゐるより仕方ないでしょうねと曖昧^{あいまい}な返事をして置くより外^{ほか}に考えも浮ばない。随分頼りない話である。

ところが不思議なことには、最近になつて見事に真直^{まっすぐ}に切れるようになったのである。別に何処^{どこ}をどう改良したというのでもなく、依然として安全剃刀の刃を手にとって切つてゐるだけなのであるが、切れてさえくればそんな詮^{せん}索^{さく}をするまでのこともない。ところでこんな研究も良いが大学で雪を切ることだけ教えるのはちよつと困るといわれれば一言^{いちごん}もない。だから早く切つ

て、その切口を色々精密器械を使つて測りたいのであるが、なかなか切れなかつたのだから困つていたのである。しかしもう切れたのだからそのような御叱おしかりを受けなくても良さそうで少し安心した。もつとも勝手な気焰きえんを揚げてもよければ、精密器械の取扱ひ方を教えることも勿論大切ではあるが、一見不可能なことも必ず出来ると思つてやれば大抵のことは出来るものだという体験を持つてもらふことも万更役に立たぬことでもなからう。

寒い目にあつて散々苦勞をして、こんな雪の研究なんかをして、さてそれが一体何かの役に立つのかといわれれば、本当のところはまだ自分にも何ら確信はない。しかし面白いことは随分面

白いと自分では思っている。世の中には面白くさえもないものも
沢山あるのだから、こんな研究も一つ位はあっても良いだろうと
自ら慰めて^{みずか}いる次第である。

（昭和十二年十二月一日）

青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎隨筆集」岩波文庫、岩波書店

1988（昭和63）年9月16日第1刷発行

2011（平成23）年1月6日第26刷発行

底本の親本：「冬の華」岩波書店

1938（昭和13）年9月

初出：「中央公論」

1937（昭和12）年12月1日

入力：門田裕志

校正：川山隆

2012年12月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪雜記

中谷宇吉郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>